

【論文】

倫理思想としての「時間」をめぐる考察

吉原裕一

一 はじめに

倫理思想史学の立場から、という上大段な物言いになるが、あらためて時間とは何なのかを素朴に問うてみるならば、たとえば時計によって示されるような一分一秒といった物理的な時間そのものに、本質的な価値を見いだせないことは明らかである。われわれが時間を問題とするのは、何事かをなすために要する時間、としてであり、したがってその時間の有する意味は、そこにおいてなされたことがらの意味如何による。

そもそも、時間という概念は、われわれの個体としての生が有限である事実に起因するのであり、もし自己の死という終局を見据えることがなかったならば、時間などというものに思いが至るはずもないであろう。その事実を前にして、われわれは自らの生、すなわち有限の時間という器にどんな内容を盛り込むべきかということに思いを馳せる。それこそが、われわれが生涯をかけて得た自己の生の総体となるからである。

われわれは普通、自己の生を時間の物理的長短の観点からのみ考えることはしない。われわれにとって大事なものは、個体としての生そのものよりも、自らがそこに主体的に見いだした、意味としての自己の生である。古来、多くの節義の士が難に臨んで自死した事績のように、自己の生を全うするために敢えて個体としての生を放棄することさえあるのは、その証左である。個体としての生、という視点にとどまる限りでは、このような現象を説明することはできない。強調していうと、われわれが自己の生を追求する上で、踏まえるべきは、個体としての生の有限性であって、その時間的長短ではない。生の有限性を自覚するからこそ、自己の生の総体を問う姿勢が生まれてくるのであり、そこにおいて時間的長短そのものは第一義的な問題とはならないのである。

ところで、われわれにとって自己というものは自明ではない。先にも述べたように、われわれは個体としての生ではなく、自己の生という意味の中に生きている。そのため、われわれは常にこの世界における自己の在りかを確

かめる必要があり、日常的にはたとえば親子であったり夫婦であったりという相互補完的な間柄において、自己を措定している。いわば、われわれが生きている世界とは、自己が他者とお互いに存在を支えあう意味の世界にほかならない。つまり、自己が存立するためには、他者という外部なる存在が不可欠なのである。

これと同様に、われわれが自己の生の総体を追究してゆくときには、個体としての生の外側をも視野に収めねばならない。すなわち、自己の生の前、自己の死の後、という自らは生きることのない「時間」のことである。いまこれを一括りに歴史と言わないのは、通常、歴史は自己という主体を離れても存在しうるものであり、ここで問題にしていることが、自己の生をいったい歴史の中のどこに位置付けるのかという一点だからである。自らの歴史認識が、自己の固有の生涯と密接に結びついており、かつ自己の存在を説明して支えている、そのような歴史、というものはやはり一般に歴史と呼ぶには不適であろう。

整理すると、われわれは他者という存在になりかわることは不可能であるにもかかわらず、自己の存立のためには他者を必要とする。そして同じように、自己の生の総体をとらえようと試みるならば、自己の生の外側に存在する「時間」というものに依拠することが必要である。これらは共に自己の生の在りかを定位することを目的とした意識上の営為である。われわれにとっての他者存在は、自らが現に生きているこの世界のみならず、自らが生きることのない世界にも求めうるものであり、意味としての世界という点では、この両者に差異はない。もちろん、われわれとは異なる世界を生きた（あるいは生きるであろう）他者存在に対して、われわれは現前する他者に対する場合と全く同じように向かい合うわけにはゆかない。一つには、彼がわれわれの語りかけに直接に応えてはくれないからである。しかし、こうした困難は本質的な問題とはならないであろう。われわれは彼について知る限りの材料全てをもって、自己の意識上にありのままの彼を存在させようと試みる。これは他者を理解することにおいて共通する方法であり、相手が現前していようといまいと、この営み自体にはかわりがない。この営みを誠実に続けてゆく中で、当初われわれと彼とを隔てると思われた時間は、その偏差が顕わになればかえってわれわれと彼とを結びつける「時間」として、われわれに新たな理解をもたらすこととなる。

本稿が「時間」という概念を扱うのは、以上に述べたような立場において

であり、論者はこれを個々の倫理思想として解釈する方法の確立を目指している。本稿は、その試みとして『常山紀談』に載せる上杉輝虎の逸話をもとに、ここで輝虎が「時間」と自己とをどのように意味づけ、何を思っていたかという問題について考察するものである。

二 源義家、源頼政の「武徳」

『常山紀談』⁽¹⁾巻之一に、越後の戦国大名であった上杉輝虎（謙信）が平家琵琶を聞いて落涙する話がある。それは源頼政が天皇を苦しめる鶴を退治したくだりであり、その中ではさらに昔、同様に源義家が妖怪を退けたという故事も語られている。ただ、これを聞いた輝虎がどうして涙を流したのか、その理由は同席している家来たちにもわからないのである。湯浅常山がこの話を採録したのは、ここをもって輝虎が非凡な将であったことを例証するためであったと考えられるが、輝虎の涙にこめられた思いをわれわれが理解するためには、煩瑣を厭わず輝虎の思索の跡をたどることが必要であろう。以下に『常山紀談』の該当部分を引用し、後『平家物語』⁽²⁾によって内容を補いつつ、考察してゆきたい。

輝虎ある夜石坂検校に平家をかたらせて聞かれけるに、鶴の段を聞てしきりに落涙せられけり。かたへの者どもあやしき思ひければ、輝虎のいはく、吾国の武徳も衰へたりとおぼゆるなり。昔鳥羽院の御時、禁中に妖怪ありしに、八幡太郎鳴弦して鎮守府將軍源義家と名のりければ、妖忽消ぬ、といへり。其後頼政鶴を射たれども猶死ずして、井野隼人⁽³⁾さし殺してとぞめたりと聞ゆ。義家鳴弦せしは天仁元年の事なり⁽⁴⁾。鶴の出しは近衛院仁平三年なれば、僅に四十六年なるに、武徳既におとれる事はかなり。又今頼政におくる事四百五十年、われ又頼政におとること遠かるべければ、おぼえず涙の流るゝよ、とぞ語られける。

『平家物語』「鶴」の段の梗概はこうである。仁平三年（1153）、夜な夜な丑の刻になると禁中御殿の上に黒雲が覆いかぶさり、近衛天皇がおびえ絶え入られることがあった。効験のある高僧貴僧に仰せつけて、仏法の大法秘法を行わせたけれども効き目がない。ところで、去る天仁元年（1108）、鳥羽天皇が同じように夜な夜なおびえられることがあった。その時の將軍、源義家

が、件の時刻になって鳴弦（弓の弦を張り、これを鳴らす）すること三度の後、「鎮守府將軍源義家」と声高く名のつたところ、人々はみな身の毛がよだって、天皇のお悩みがお治りになったという。公卿の会議の結果、義家の先例にしたがって武士に警固させるべきだということで、源平両家の武士の中から特に源頼政が選出された。頼政は「昔から朝廷に武士を置かれるのは、反逆の者を退け、勅命に背く者を滅すためである。目にも見えない変化を退治せよとご命令を下されることは、まだうかがったこともない」と申しながらも勅命なので、深く頼みにしている郎等、井野隼人一人を連れて参内した。頼政は矢を二筋携えて伺候したが、これは源雅頼が頼政を名指しで推薦した人物なので、もし一の矢で変化を射損じでもしたら、二の矢では雅頼の首の骨を射ようと思つてのことである⁽⁶⁾。さて、件の時刻になると黒雲が御殿の上にたなびいたが、頼政が見上げると雲の中に怪しい物の姿がある。これを射損じようものなら、世に生きていられようとは思わなかったが「南無八幡大菩薩」と心の中で祈念して射たところ、手応えがあつてはたと当たる。井野隼人がつと寄り、変化が落ちるところを取り押さえて、続けざまに九回刀を刺した。見れば、頭は猿、胴体は狸、尾は蛇、手足は虎という怖ろしい姿で、鳴く声は鶴に似ていた。天皇は御感心のあまり、頼政に獅子王という御剣を下されたという。

『常山紀談』の考察に戻ると、輝虎は、義家と頼政を比較するのに「武徳」という語を用いている。「武徳」とは、他者に対して発揮されるべくその身に備わっている武力であると、ここではひとまず押さえておきたい。『平家物語』は鶴退治の一件を頼政の「一期の高名とおぼえし事」とであると述べており、現に頼政は天皇をはじめ人々が彼に期待したことを立派に遂行したのであるが、輝虎は、頼政が義家より「武徳既におとれる事はかなり」とはっきり断ずる。その根拠を明らかにするため、まずは輝虎が頼政と義家の各々の「武徳」をどう見ていたかを個々に整理してみることとする。

頼政は、最初の矢で誤たず鶴を射止めた。これは彼が武士として弓矢の扱いにすぐれた技量を有していた事実を示している。また、郎等の井野隼人が射落とされた鶴にすぐさま駆け寄り、九回も刀を刺して倒したというのも、勇気なくしてはできない武辺であり、その場にあった人々の目には、これほどに恐ろしい鶴を退治した主従の見事さが強く印象づけられたであろう。頼政のはたらきに感心して天皇が御剣を賜ったというのも、もっともなことであつた。

しかし、輝虎にとっては、逆にそのことが頼政の「武徳」の不足と映っているのである。鶴を射当てたのはまだよいにしても、それで鶴が「猶死す」というのは頼政の矢が「武徳」として不十分であったことになる。井野隼人がとどめに九回刺さねばならなかったのも、鶴がそれだけ強敵であったからというのではなく、むしろ頼政の矢がそれだけ弱かったためと見るのである。矢は、頼政の「武徳」が極めて具体的な形で発動したものであり、発動した以上、それを頼政の「武徳」そのものであると端的に輝虎は理解する。したがって、その矢が鶴を倒すにいたらなかったのならば、頼政の「武徳」に鶴は勝っていたという明白な事実が残るのみである。井野隼人の「武徳」を加えることで、ようやく鶴を凌ぐにいたったものの、そうした主従の苦労は頼政の「武徳」の腑甲斐無さの露呈でしかない。いやしくも頼政自らが矢を射たのであれば、その一矢で鶴を倒し、頼政の「武徳」を自他に示さねばならなかったのである。だが、それは残念ながら果たされなかった。すなわち、頼政の鶴退治は、結果として成功したように見えるけれども、「武徳」に関する内実を考えるならば満足できるものではなかった、と輝虎は見ている。

翻って、義家の「武徳」はどうであったか。義家の場合は、一見すると妖怪と直接に戦ってはいない。弓の弦を鳴らし、名のりをあげたのみである。しかし、それで妖怪は忽ち消えてしまったという。ここでいったい何が起こったのかは、妖怪の立場に身をおいてみるとよく理解できると思われる。

義家の名のりを受けた妖怪は、二つのことを知ったのである。まず一つ、ここにいる武士が、かの有名な源氏の棟梁、八幡太郎義家であるということ。その名を聞けば、赫々たる戦歴は言うに及ばず、東国武士の衆望を一身に集めている、武人としてのあまりにも大きな存在を誰しもがすぐさま思い浮かべる義家である。さらにもう一つ、その義家が名のりをあげたのは、まさにこれから自分を滅ぼすために敵となって向かってくるからだということ。この名のりを端として、妖怪は否応なく義家との戦いに引き込まれてしまったのである。いったん戦いとなった以上、妖怪が生き残るためには義家に勝つほかはない。が、それはいま無理なことだと妖怪はさとしたのであろう。もともと、妖怪の側に義家その人と戦うべき理由はないのである。戦う覚悟のないまま、戦いに突入してしまったなら、その時点でもはや自分は負けている。相手が義家ならば、なおのことである。だから、妖怪は戦いを捨てて逃げたのである。

したがって、義家の名のりは、まさしく彼の「武徳」の十全な発動であっ

たといえる。妖怪は、これによって、実際に義家と戦う前に、戦った後のなりゆきまでをありありと想像し、それが現実となる恐怖を避けるべく逃げた。しかし、義家の立場からみれば、名のりをあげたときにはすでに彼は戦いに突入しているのである。戦いとは、直に弓箭・刃を交える状態のみを指すのではなく、本質的には戦う意志の表現であると論者は理解している。つまり、義家一人だけがこの場でまっとうに戦っていたのであり、その結果、義家は妖怪との勝負を迅速に制したわけである。

さらに、義家の名のりを聞いた人々はみな身の毛がよだったというのは、自分が今までいたまさにこの場が一瞬にして〈義家の戦場〉という非日常的な空間に転じたことに狼狽し、いわば臆病風に吹かれたからであり、戦う者を前にして戦わぬ者が抱く恐怖を妖怪の万分の一なりとも共有しえたことを意味しよう。この場で何者かが「武徳」を発動しようと試みるならば、それはとりもなおさず義家の「武徳」を侵す敵対行為となる。かりに義家への助太刀を意図していたとしても、名のりをあげてその場へ参入することは、義家と妖怪との戦いを妨害することを意味するのだから、それを義家は決して許さないであろう。したがって、全ての者は、自らの「武徳」を深く隠し、義家と戦う意志がないことを明らかにせねばならない。すなわち、義家の名のりがこの場に響き渡った瞬間、義家以外の者は全て臆病とならざるをえなかったのである。義家がいま相手としているのが妖怪であることは重々わかってはいても、まかり間違って自分が義家と戦うようなことになったなら、という想像が人々の恐怖を喚起する。それほどに、義家の「武徳」の発動はこの場を圧倒したのである。凄まじいばかりの「武徳」であった。

三 「武徳」とはなにか

輝虎が聞いた平家琵琶の中ではおそらく、頼政が変化退治を命じられて不承不承従ったことや、そのあらわれとして万が一失敗した折には雅頼を射るための矢を携えていたことが語られていたであろう。それは確かに、これから戦いに赴く武士の心ばえとしては、若干の不足があることは否めない。一方、義家の事績は人々の回想であるから、頼政について語られているような子細が実際にはあったにもかかわらず、物語の中では捨象されているという可能性もある。よって、輝虎が平家琵琶の内容からこの兩人に対して抱いた印象というものに配慮するならば、どうしても頼政への評価の方が不利にな

ってしまったであろうことが考えられる。だが、それはあくまでも推測の域にとどまることであり、いま指摘はしても論じるべき問題ではない。本稿の目的に沿って、『常山紀談』内部における輝虎の理解を考察対象の中心に据えるべきである。

さて、先述したように『常山紀談』の中で輝虎は、頼政が義家より「武徳既におとれる事はかなり」と断じている。ここでは、前節でとりあげた義家、頼政、それぞれの「武徳」を踏まえ、輝虎がこの二人の比較を通じて何を見ていたのかという問題について考察したい⁽⁶⁾。

あらためて整理してみると、義家、頼政が遂行を求められたことは、禁中において天皇を苦しめている妖怪を退け、天皇の苦しみを除くという同じ任務であった。その目的に関する限りにおいて、両者は共に人々の期待に応えている。その結果に優劣はないといえるであろう。

しかし、輝虎は両者が同じ結果を出していることよりも、そこへ至るまでの両者の振る舞い方の差異に目をつけている。それは端的に言えば、輝虎が武士であったからである。朝廷の人々は、妖怪退治という戦いにおいてはおしなべて傍観者であり、その戦いの内実を考えるような視点は持っていない。義家と頼政の両者を武士として見るという局限された見方そのものが、実は輝虎自身がすぐれた武士であることを明白にあらわす証左となっている。両者の「武徳」を論じることは、輝虎自身もまた「武徳」を備えた存在であるということの意味するのである。

義家が妖怪に対し、まず行ったことは「鳴弦」であった。この音を聞いた妖怪は、それを発している武士の弓勢が異様に強いこと、したがって実際に彼の矢が放たれたとき、それがどれほどの威力を持つものかを想像する。義家もまた、それを知らせる為に「鳴弦」するわけである。その後、自分が「鎮守府將軍源義家」として「名のり」をあげた。ここは自分が支配する戦場となったことを明らかにするとともに、先の「鳴弦」がほかならぬ「八幡太郎」のものであり、ここで自分に抵抗しよう者には「八幡太郎」の矢が向けられることを示したのである。これにより妖怪は、戦場にとどまって戦うのか、それとも戦うことを放棄してこの場を去るのか、と追いつめられることとなる。前節ですでに見たように、妖怪は去った。

つまり、敷衍するならば、義家は、実際に矢を射るなどの武力を行使する方法ではなく、相手に「武徳」の優劣を自ずからはっきり認めさせることで勝負を決する方法をとったのだといえる。「鳴弦」と「名のり」は相俟って、

ここで発動している「武徳」が義家のものであることを他者に証明している。この強い「武徳」は義家のものであったかと知り、やはり義家の「武徳」は強いものなのだと知る。この循環のうちに、妖怪は自らの「武徳」がもはや発動できないことに思い至り、義家という存在の前から消えざるをえなかったのである。

本来、戦いにおいては武力と武力のせめぎ合いによって、敗れた方は、相手の武力の背後にある「武徳」が自分のそれよりも優っていたことを認めるものである。要するに、実際に戦ってみて、結果的に負けたのならしづしづ相手の「武徳」を認めなくてはならないけれども、結果を見るまではわからないわけである。むしろ、自分の「武徳」こそが優っているのではないかと思い、それを証明できると思うから、相手と戦えるのである。あるいは、時の運などというものによって、「武徳」の発動は助けられたり妨げられたりするものであるから、相手の「武徳」がどうであれ、うまくゆけば幸いに勝負を制することもあろう。やはり、戦いにおいて結果に期待する場合は多いと思われる。

ところが、義家の前に出るものは、そういう目論みを捨てざるをえない。妖怪が現にそうであったように、義家の「武徳」と存在とは一枚になっていて、義家の「武徳」の不発を偶然に俟つ余地などまったくないことを知るからである。逆にいえば、常に「武徳」が十全に発動している存在こそが義家なのである。禁中に出た妖怪に向かう義家の振る舞いは、そのことをよくあらわしている。輝虎が、義家の行為を妖怪退治などという表現ではなくただ「鳴弦せし」と述べているのは、その「鳴弦」が義家の「武徳」の完全なる発動を意味しており、その結果をわざわざ明らかにするまでもないからである。

次に、頼政の振る舞い方を、義家の場合と比較しながらみてゆくことにしたい。

まず、押さえておくべきことは、頼政が鶴と戦うにあたって名のりをあげていない点である。頼政は、妖怪の姿を黒雲の中に認めるも、名のりをあげずに矢を射た。これは、獣を狩るときと同じ振る舞いであり、相手が所詮自分の敵に値しないと思っていた頼政の意識をあらわしているといえよう。あるいは、人ではなく変化であるから、矢を射当てたところでどうなるものかと考えていたのかもしれない。いずれにせよ、頼政の頭は、最初の矢を外さないように、という一念で凝り固まっていた。もし、この矢が自分の「武徳」

の発動であることを認識していたならば、頼政はこの一矢で妖怪を必ず倒すことを思い詰めたであろうが、事実はそうではなかった。そのために、頼政の矢は彼の「武徳」の発動、少なくとも十分というべき発動ではなくなってしまった。

したがって、頼政の矢は、ただいたずらに鶴を射ただけで終わる。「頼政 鶴を射たれども猶死ずして」という輝虎の言葉には、頼政の「武徳」の不足を無念に思う気持ちがあふれている。また、このなりゆきから、最初に敵を軽んじていた頼政の不覚悟も同時に明らかとなってしまった。たとえ井野隼人が鶴を仕留めても、頼政の失敗が消えることはない。端的に言えば、義家が最初から妖怪との戦いに一心にはまりこんでいたのとは対照的に、頼政は鶴と戦っていなかった、ということになる。義家の「鳴弦」は、確かに妖怪を射て、しかも妖怪を圧倒して消し去った。頼政は、矢を射当てたにもかかわらず、鶴を圧倒することができなかった。頼政の「武徳」が義家より「おとれる事はかなり」と輝虎が考える所以である。

輝虎は、この両者の「武徳」の差異を、「武徳」の発動した状態如何の中に見ている。頼政の「武徳」が十全に発動しなかったのは、この場における頼政自身の覚悟や心ばえに起因する。が、「武徳」はそれだけで決まるものではなく、そうした頼政の存在に関わる全てを含めての「武徳」である。頼政の心、振る舞い方、他者の目にも明らかな武力、それらは別のもののようでありながら、頼政の「武徳」という大きな一つのものを成している。武力が強さなのではなく、「武徳」が強さなのである。義家が強いのは、すでに述べたように、義家という存在が「武徳」の十全な発動そのものだとは敵が理解するからである。それを理解してしまった敵は、もはや義家と戦うことができない。また、義家は、それを全ての他者に理解させるべく振る舞う存在である。このように、「武徳」を発動するという行為は、自己において為されるものでありながら、他者との間においてのみ、その実現を見ることができる。義家が「武徳」を発動している状態とは、その場にいる全ての他者が義家という存在を理解している状態、そして同時にその場にいる全ての他者の存在を義家が理解している状態のことである。（極言すれば、義家は、いつでも誰の目にも〈義家の武徳〉として理解され、それ以外の理解の可能性を残さない存在である。後世、神格化されるほどの強さは、こうした全人的な表現によるものであろう。）

頼政が「武徳」を理想的に発動できなかったのは、彼が鶴の存在を十分に

理解しておらず、したがって鶴に頼政の存在を十分に理解させることができなかったからであった。頼政の矢が鶴に当たってしかも鶴が倒れなかったことで、頼政と鶴はお互いに少し理解を深めたのであるが、結局両者の理解が十分になされることはないまま、事態は終局を迎えてしまった。

四 輝虎の在りか

これまで輝虎の視点を借りて見てきたように、義家と頼政の間には截然たる差があることは認めざるをえない。そのことを示す材料をもう一つ付け加えると、頼政が退治した相手は「鶴」であるが、義家の場合は「妖怪」とだけ、輝虎は述べている。義家が「鳴弦」したのは天仁元年、この時、妖怪は姿を見せることもなく、義家の「武徳」によって消え去った。両者が、遠く離れていながらもお互いの存在を十分に理解したためである。ところが、仁平三年、頼政の時には、妖怪は鶴の姿を現すまでに近寄らざるをえなかった。これは、頼政の「武徳」が不足していたことによる。

「武徳」が衰えてしまったために、たった四十六年で、鶴が出てしまった。このことを単に物語中の出来事だと解釈するならば、頼政一人を責めれば事足りる。しかし、輝虎はそうしない。これこそ、輝虎の武士という立場を如実に示すものである。

輝虎は、義家にはるかに劣るという頼政の「武徳」の差の要因を、頼政自身に負わせるのではなく、二人を隔てる「四十六年」という歳月に見る。さらには、頼政と輝虎自身が「四百五十年」という歳月で隔てられていることをも同時に見ている。輝虎は、義家・頼政・自己を、歳月という一つの流れの中に存在する三者だとみなすのである。その歳月というの、数量を示す一般的な意味ではない。義家以来の約五百年は「吾国の武徳」が衰えてきた「時間」であり、輝虎自身がその末端に生きていると考えている。ここにおいて、輝虎は、義家・頼政・自己を「吾国の武徳」をあらわす「時間」軸の上に定位し、お互いの存在を理解可能としたのである。本来、彼らを隔てていたはずの歳月は、「武徳」という尺度を与えられることで、かえって彼らの間をはかることのできる「時間」となり、それが「吾国」という共通の地盤によって一元的にとらえられる。ここにおいて輝虎は、平家琵琶の物語を内在的に解釈することにより、一個の倫理思想を打ち立てたのである。

ところで、頼政は、義家の又従兄弟の孫にあたる。分かれてはいても、共

に源氏の一族である。輝虎はといえば、もともと長尾氏であり、桓武平氏の流である。後に、没落した関東管領・山内憲政から上杉の名跡を継ぐが、これも藤原氏の流であり、源氏ではない。すなわち、父祖の事績というならともかく、輝虎が、源氏である義家、頼政にここまで思い入れを抱く必然的理由はないともいえる。

輝虎が、彼らと自己とを確かに結ぶものとして示したのは、「吾国の武徳」を背負っているという自覚である。その自覚こそが、輝虎に「われ又頼政におとること遠かるべければ、おぼえず涙の流るゝよ」という慙愧の念を呼び起こす。落涙する輝虎の意識は、「吾国の武徳」が衰えてゆく一方の「時間」の流れの上に視点を得て、義家、頼政をはるかに望む末流に自己の生がいま在ることを見ているのである。ここで「武徳」における輝虎の理想は、義家といってよい。輝虎が、自己と義家の間に見ている「時間」は、自己がまさにこれから回復すべきところの衰えた「吾国の武徳」の総量である。現実にはそれを回復する方向を目指すか否かは別として、少なくとも理想とするものから自己が遠く隔たったところにいることが確かに感得されているからこそ、輝虎は落涙したのである。こうしてみると、向後輝虎は、現今の生に在りながら、自己の生前に厳然としてある「時間」の中を遡及する思想的営みを当為として続けることになるはずである。輝虎の武士としての存在が、理想としての「武徳」を求める。その理想への遠さを思っ涙する輝虎の情念が、「武徳」を持つ者としての輝虎の存在を規定する。この補完的な循環の中に、輝虎の生は確かに自覚されている。かくして自己の在りかを見いだした輝虎が落涙した心の内実を「かたへの者どもあやしみ思ひければ」というように、やはり自然に理解するには無理があろう。

本稿は、輝虎の落涙を出発点として、その真の意味を問うべく深読み・深読みを重ねて輝虎の思索をたどったものである。結果として、ここに輝虎独特の倫理思想を見いだすに至ったのであるが、「時間」という視座を自己の生の外側に得て、自己の生の在りかを見定める方法の試みとしては、まずまず有効な成果を収めたのではなかろうか。

注

⁽¹⁾ 『常山紀談』の引用は、森銑三校訂『常山紀談』（岩波文庫）、岩波書店、昭和13年、に拠る。旧字体の漢字を新字体で表記する等、私意により一部改め

た。

- (2) 『平家物語』の内容は、市古貞次校注・訳『平家物語』（日本古典文学全集）、小学館、平成6年、を参照した。
- (3) 『平家物語』では井^い草^{はやな}太となっている。
- (4) 源義家は嘉承元年（1106）に没しているので、天仁元年（1108）に義家が鳴弦して妖を退けたという『常山紀談』中の記述は史実として誤っている。『平家物語』（日本古典文学全集）ではこれが寛治年間（1087～1094）、鳥羽天皇ではなく堀河天皇の代の出来事とされている。しかし、本稿がここで目指しているのは、輝虎が義家、頼政と自己とを引き比べて何を考えたかを明らかにすることであり、あくまで対象とすべきは輝虎の意識上の営為である。誤った史実認識が基になっていたにせよ、そこから得られた自己をめぐる輝虎の洞察は、これを倫理思想として論じるのならば何ら問題はないと論者は考えるので、以下、『常山紀談』の記述に載せる輝虎の言葉に拠ることを主として論じてゆく。
- (5) 頼政が、矢を二筋携えていたことの意味は、頼政自身の思いなしを内面的に解釈してとらえるべき問題である。本稿では、輝虎の目に映った頼政の姿を叙述することが主眼であるために、この問題に深く立ち入ることはしなかったが、二三の点を指摘しておく。言うまでもなく、頼政もまた『平家物語』におけるすぐれた武士の一人であると論者は考えている。有名な那須与一の例と同様、頼政も一の矢に全てを懸けていた心映えが、そのことを十分に示している。本稿では、頼政が戦いに没入できなかった結果、一の矢で妖怪を倒せなかった点を不足と断じたが、頼政の側から考えるならば、意に染まぬ戦いへと駆り出されたことの理不尽を大いに勘考すべきである。それでも勅命を重んじて、戦いに臨んでゆく姿勢は立派であるといえよう。また、結果的に、二の矢を用いることはなくて済んだのであるが、源雅頼はまさか自身が二の矢の的になるかもしれないとは考えていなかったであろう。しかし、頼政は自らの命を懸けて戦いに臨むのである。それが武士としての振る舞いである以上、頼政を推薦した雅頼は、自己の行為の持つ重さを知り、頼政に対する責任を負うのが当然である。しかし、『平家物語』の中では、そうした雅頼の自覚は確認できない。少なくとも、頼政は雅頼が何らかの責任を感じているとは考えていなかったため、もし事が失敗に終わったときは、連帯責任を負わせるつもりで二の矢を準備したのである。自身が戦うこともなく、また頼政が武士であることの意味を理解していない雅頼は、武士ではない。頼政が雅頼の首を射て殺そうと思ったのは、感情的な暴発によるものではなく、武士としての覚悟とその表現である振る舞

いを、武士ならぬ身の雅頼に理解させるためである、といえる。以上のような視点を踏まえるならば、頼政が矢を二筋携えていたことは、決して彼自身の未練を示す証左にはならないであろう。

- (6) 菅野覚明は『武士道の逆襲』（講談社、平成 16 年）54 頁において「武士が頼みとする己れの実力のことを、古くは『兵の威』と呼びならわしていた。」と述べている。「兵の威」は、その武士が有している実力と、それが相手に対して発動したものとの両方を含んでいると思われるので、輝虎のいう「武徳」とほぼ内容的に重なる概念である。また、同書 63、64 頁において菅野が「実力は、表現されてこそ実力である。逆にいえば、表現のさま、表現の仕方を見れば、その武士の実力のほどは知られる。」と整理しているのは、武士の倫理を説明して明快である。本稿でこの後述べるように、義家と頼政の比較を行うにあたり、「武徳」の発動する仕方に着目していることから、輝虎もまた同じ視点を共有していたと考えられる。